

ゼファニヤ書 1章 7、12-19 節

テサロニケの信徒への手紙一 5章 1-10 節

マタイによる福音書 26章 14-15、19-29 節

2023年もあと一か月とすこしとなりました。教会歴も二週間ほどでアドベントを迎えます。そのような変化の時だからと思いますが、本日の三つの聖書日課は、「終わり」という事柄が大きく関わっています。

旧約日課「ゼファニヤ書」で預言者ゼファニヤは、「**主なる神の前に静まれ。主の日は近づいているからだ**」（ゼファ 1：7）と語ります。「主の日」とは、終わりの時であり、また、何かが変わる日です。ゼファニヤは、その「主の日」の到来を告げることによって、異教の神を信じ、それに対して祭儀をするイスラエル（ユダ王国）を厳しく批判しています。ただし、ゼファニヤはヨシヤ王とは共同関係にありましたので、批判しているのは宗教的な指導者たちと、それに従う民衆です。彼はその日を「**その日は怒りの日、苦しみと悩みの日、荒廃と滅亡の日、闇と暗闇の日、雲と密雲の日**」（ゼファ 1：15）と説明します。また、「**主の怒りの日に、全地は主の妬みの火で焼き尽くされる。実に、主は恐るべき破滅を、地上に住むすべての者にもたらす**」（ゼファ 1：18）と語り、主の日が非常に恐ろしく、またその滅亡が広い範囲に及ぶことを語ります。

ゼファニヤがここで語っている「主の日」の破滅は、「**地上に住むすべての者にもたらす**」とはあるのですが、この世界が終るような、いわゆる終末を意味していたのかということ、そうではないようです。そのような強い批判を語る目的が、イスラエル（ユダ王国）の人々が、主なる神様への信仰に立ち返ることであるからです。また、それゆえに、イスラエル（ユダ王国）において宗教改革をしようとしている王ヨシヤと、歩みを同じくすることができたのです。

本日の使徒書「テサロニケの信徒への手紙一」にも「主の日」という言葉があります。パウロにとっての「主の日」は、ゼファニヤと同じような内容でもありますが、「世界」の「終わり」の時である以上に、新しい「世界」の「始まり」の時です。主イエス・キリストが再び来られる時と考えていたからです。

テサロニケへの信徒への手紙が書かれた時代、パウロは「主の日」の到来が非常に近いと思っていました。しかし、それがいつであるかは、明らかにしていません。「**きょうだいたち、その時と時期がいつなのかは、あなたがたに書く必要はありません。主の日は、盗人が夜来るように来るということを、あなたがた自身よく知っているからです**」（1テサ 5：1-2）とある通りです。「主の日」は、人間が予測できるようなものではなく、また予測するようなものでもなく、突然やって来るものなのです。しかし、「**しかし、きょうだいたち、あなたがたは闇の中にいるのではありません。ですから、その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません**」（1テサ 5：4）とも語っています。理由は、「**あなたがたは皆、光の子、昼の子だからです**」（1テサ 5：5）。

「主の日」は、人間的考えではいつ来るかわからないが、光の中を歩んでいるキリスト者にとっては突然来るようなものではない、この矛盾する表現は、「主の日」を待ち望むにあたって、大切な事柄が、「**ですから、ほかの人々のように**

眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう」(1テサ5:6)ということであるからです。「慎んでいること」が大切なのです。すなわち、「主の日」をただ眠るように待ち望むのではなく、単に恐れるのでもなく、しっかりとした生活をしながら待ち望むことが大切なのです。パウロは、8節で「身を慎んでいきましょう」ともう一度語りますが、その間に「眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔います」(1テサ5:7)と語ります。その理由は、「慎んでいる」という言葉の本来の意味は、「酒を飲んでいない状態、(酒を飲んで)興奮していない状態」であるからです。「主の日」を待ち望むにあたって、眠るのでもなく、酒に酔って興奮するような状態でもなく、冷静に日々の生活を送りながら待ち望みましょうと、パウロは語っているのです。これはパウロの終末に対する態度として一貫している事柄です。

パウロはそのように終末に向けて歩む目的を、「主は、私たちのために死んでくださいました。それは、私たちが目覚めていても眠っていても、主と共に生きるためです」(1テサ5:10)とまとめます。この言葉は、わたしたちが、それぞれの死を迎えたとしても、十字架の死を迎え復活されたイエス様の姿にあずかって、永遠の命を歩むことを示します。また、「主と(直訳では「彼と」)共に生きる」こと、それは、新しい「世界」に生きることですが、まったく新しい世界ではなく、天地創造の初めにあったような世界に生きることでもあります。この世界は、本来は主なる神様が良しとされた世界であるからです。

聖書日課は5章10節で終わっていますが、次の5章11節でパウロは、「ですから、あなたがたは、今そうしているように、互いに励まし合い、互いを造り上げるようにしなさい」と勧めています。「互いを造り上げるようにしなさい」という部分は、前の新共同訳では、「お互いの向上に心がけなさい」となっていました。「家を建てる」という意味の言葉ですから、新しい訳の方が本来の意味に近いのですが、教会に集められるキリスト者は、それぞれが単に冷静に「主の日」を待ち望むだけではなく、互いに教会生活を通して、励ましあい、支え合いながら待ち続けなさいとパウロは勧めているのです。そのような生活を送るからこそ、「主の日」が突然来ても大丈夫なのです。

福音書のたとえ話では、それぞれに与えられた「タラント」を用いることの大切さが語られています。主なる神様が与えてくださった「タラント」は、自分のためであり、誰かのためであり、そしてそれを与えてくださった主なる神様のためだからです。教会は、自分に与えられた「タラント」とは何か、それを発見する場所であり、またその「タラント」をより豊かに用いる場所です。世界の終わりがいつかはわかりませんが、一方でわたしたちの一人ひとりに与えられた命の長さには限りがあります。また、一般の社会では引退、退職などがあります。しかし、教会においては、それぞれのあり方で、わたしたちはいつも「タラント」を発見し、生かすことができます。そして、それが大切なのです。ことにわたしたちの教会は、「タラント」を生かす条件が、豊かにあります。聖堂大改修の後には、少し経済的な厳しさもありますが、そうであってもそれぞれの「タラント」を用いながら、互いに支え合う歩みが、パウロの語る、「主の日」を目指す歩みに他ならないと思います。それは時代が変わっても、また世界の状況がどのようなであっても、変わらない歩みです。その歩みをこれからもわたしたちの教会を通して続けたいと思います。